

## 9月5日 年間第23主日

知 9:13~18 ファレ 9b~17 ルカ 14:25~33

### 1. ルカ

“信仰”という言葉ほど、ある意味でいい加減に理解され、あいまいに使われている宗教用語はないかも知れません。「カトリック教会のカテキズム」はその冒頭で先ず、信じるとはどういうことかを取り上げています。そして“神について知る”というレベルで信仰を考える場合には、“多様なしかたで、あいまいなところがあっても”そのような宗教的行動は人類に普遍的なものであると説明しています(同 27/ロマ 3:18-23 参照)。しかし、聖書はこれを神のことばを聞くことと結びつけて、“信仰による従順”(ロマ 1:5)という意味で考えているのです。使徒たちが宣べ伝えたキリストの福音を、ただ聞くだけではなくて、これを信じて受け入れ、自らをその救いに委ねるといふこと、つまり聞き従うということなのです(1ペト 1:3-9 参照)。

ところが実際には多くの方が、キリストの福音だけではなくて、それと並んで他のたくさんの“あれやこれや”を、自分の生き方を決める大切な動機ないし参照材料として、同時に持ち続けています。ルカ福音書は私たちにこの事実を気づかせようとして、マタ 10:37-38 と同じ伝承をこのような厳しい表現で語りました。私たちは今朝の福音書のテキストだけを孤立させて機械的に(原理主義的に)解釈してはなりません。vv.25-27 を ルカ 8:21, 11:28 と共に読み、vv.28-33 を ルカ 6:46-49 と併せて読むと、聖書が述べている“信仰”とはキリストの福音に聞き従うことであると気づくでしょう。聖書が語る従順とは、外ならぬ福音への従順のことなのです。

それでは、私たち信者はどのようにしてキリストの福音を学ぶのでしょうか。カトリック教会は常に一貫して、「聖書だけから啓示されたすべてのことについての確信を得るのではない」と主張して来ました(神の啓示に関する教義憲章 9)。司教とこれに従属する司祭は、キリストの福音を「真理の霊の導きの下に、説教によってそれを忠実に保ち、説明し、普及する」(同)のです。この説教の役割については、プロテスタント教会も全く同様に理解しています。しかし現実には、残念なことにほとんどの信者は、カトリックでもプロテスタントでも、“使徒たちから伝えられた福音”を説教で聞かされていない……つまり説教が本来の意味での説教になっていないということを指摘せざるを得ません。

確かに「聖伝と聖書とは、教会に託されている」(同 10)ということと、教会の豊かな財産である「聖なる教父たちのことばは、聖伝のこの活きた現存を証明する」(同 8)ということに、感謝出来る人は幸いです。そのような人だけが、“信仰の従順”に生きるために自らも努力して福音を学ぶという計算を、実行出来るようになるからです(v.28)。

### 2. ファレ

聖書が19世紀や20世紀に書かれた文書ではないという当たり前のことに、どうか注目してください。フィレモンというこの時代の信者に、その奴隷(所有物 = 財産)であった一人の男を、考えを変えて一人前の人格として、「つまり愛する兄弟として」(v.16)迎え受け入れてくれという要求は、たとえそれが使徒パウロからの「頼み」(v.10)であっても、とても尋常なことではありませんでした。フィレモンにとってそれはコペルニクス的転回を強いるものであったに違いありません。

これは人情話などではない！ 福音への従順、信仰の従順の問題として、パウロは監禁されているローマからこの手紙を書いていた。ただ希望に答えて彼が妥協してくれることを願ったのではありませんでした。そうではなくて、「主によって、キリストによって」彼から「喜ばせてもらい、心を元気づけられる」ことを要求したのです(v.20)。

福音に聞き従うということを、私たちは大きな感激と共に理解しようではありませんか(ガラ3:26-29参照)。私たちはそのようにして、聖書の学びを通して、「(教会に)伝えられた教えの規範」(ロマ6:17、1コリ11:2)を受け入れる途を見出すことが出来るのです。

### 3. 知

v.17 「あなたが知恵をお与えにならなかったなら、天の高みから聖なる霊を遣わされなかったなら、だれが御旨を知ることができたでしょうか。」

私たちは、確かに聖伝と聖書とが教会に託されているということに心を向け、感謝しましょう。教会に託されたこの豊かな福音の宝は、信者一人一人が真剣に学ぼうと努力するなら、「あなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある」(ロマ10:8)と言えるようになるのですから。

ハレルヤ、アーメン。

## 9月12日 年間第24主日

出 32:7～14 | テモ 1:12～17 | ルカ 15:1～32

### 1. ルカ

v.21 「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。」

vv.25 以下に登場する兄がこの言葉を聞いたなら、おそらく、“その通りだ、当たり前だ”と返事したことでしょう。そして、それがルカ福音書におけるこの物語りの本来の主旨なのです。私たちは気づかずに、現代の価値観という色眼鏡を通して聖書を読んでしまうことが、なんと多いことでしょう。悔い改めた放蕩息子が善人で、怒る兄が悪人であるように思ってしまうのが普通だとしたら、それは明らかに“色眼鏡を通して聖書を読んでいる”こととなります。

新約聖書において用いられている“悔い改める”という言葉は、ユダヤ教の律法学者が理解していたように、“悪人がその行いを改めて善人になる”という意味で受け取ってはなりません。“見失った羊”(v.6)も“なくした銀貨”(v.9)も、そんな意味で悔い改めたりはしない、いや出来ないからです。この二つの譬え話の説明として、それに続く放蕩息子の譬え話は語られているのですから、私たちは上記のv.21をいささかも“殊勝な改心の言葉”のように理解すべきではないのです。そうではなくて、まさに“その通り、当たり前”であるということが、本来の主旨なのです。

そのように読むとき初めて、私たちは福音が語る“罪の赦しと救い”が全く“恵み”であり“神の賜物”(エフェ2:8)であることに気づきます。「では、人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました。どんな法則によってか。行いの法則によるのか。そうではない。信仰の法則によってです。」(ロマ3:27)

“悔い改める”とは、“立ち帰ること”(エシ4:1)、父なる神に“再び見つけていただくこと”(vv.6,9,24,32)なのです。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」(Iヨハ4:10)

### 2. テモ

使徒パウロの生涯は、「イエス・キリストは罪人を救うために世に来られた」(v.15)という事実の、いわば典型であります。彼は「その罪人の中で最たる者」(同)であり、キリストが彼の救いのために「限りない忍耐をお示しになった」(v.16)ということ、聖書は語っています。そのような意味で初代教会はパウロを、「キリストを信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本」(同)と理解しました。

vv.12-17は、使徒パウロの直接の言葉であるよりも、むしろ初代教会の理解を示していると考えの方がよいかも知れません。そうだとすると、初代教会の証言を通して、使徒パウロはキリストの福音を今も私たちに語り続けているのです。むしろ、やがて“聖パウロ”と尊称を付して呼ばれるようになるパウロを、いさ

さかも弁護したりしないで、「神を冒瀆する者、迫害する者」と述べていることの重大さに、私たちは驚きを覚えずにはられません。

### 3. 出

心優しいモーセの説得によって、「御自身の民にくだす、と告げられた災いを思い直された」(v.14)頑固親父の物語りのように、このテキストを読んでしまう誘惑が、近代人だけのものなど考える必要はありません。すでにイエスの処刑の場面で、共に十字架にかけられた犯罪人の一人に、もう一人が「お前は神をも恐れないのか」と言ったと、ルカ23:40は証言しています。

モーセは偉大な預言者でありました(申34:10)。主は人がその友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語られました(申33:11, 34:29-35)。しかし、罪を赦すことはただ神にのみ属するのです(マコ2:7)。「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。」(34:6-7) 私たちは、この神の恵みにひたすら信頼し、感謝しましょう。

私たちは「キリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ」ました(ロマ5:2)。「憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、――あなたがたの救われたのは恵みによるのです――」(エフェ2:4-5)。

ハレルヤ、アーメン。

## 9月19日 年間第25主日

アモ 8:4～7    Iテモ 2:1～8    ルカ 16:1～13

### 1. ルカ

私たちがここで、“管理人”という呼称を直ちに“神の家”すなわち教会と結びつけて理解しないなら、聖書とも神のことばとも無縁な世界に迷い込んでしまうこととなります。我が国ではほとんどその実体が消失してしまっている“家”という概念が、聖書の世界では生き活きと語られているからです。

聖書の時代の“家”には、親や子供たちと共に、一緒に生活している親類や、その奴隷たち、雇い人たちすべてが含まれていて、それはかなり大きな一群の集団でありました。旧約聖書で“イスラエルの家”という呼び方がされているように、新約聖書では教会のことが“神の家”と呼ばれています(Iテモ 3:15)。言うまでもなく“家”にとって、その一致団結が重要であるという理解が、その根底にあるのです。

イエス・キリストは、この「神の家を支配する偉大な祭司」(ヘブ 10:21)であって、「御子として神の家を忠実に治められる」のであり、「わたしたちこそ神の家なのです。」(ヘブ 3:6) そして使徒パウロは、他の働き人と共に自分たちが、“神の家”である教会に仕える務めを委ねられた管理者であると自覚していました(Iコリ 3:9, 4:1)。

古代の“家”において“管理人”とは、奴隷たちの中で絶大な権限と責任を委ねられた人ではありましたが、他の召使いたちにも各自に委ねられた務めがありました。「どんな召使いも」(v.13)、それぞれに委ねられた「ごく小さなことに忠実」(v.10)であることから決して逃れることは出来ません。そのことが理解出来ると、この譬え話は私たち一人一人に無関係ではなくなります。

先週は民主党の代表選で、管氏と小沢氏が必死で「賢くふるまって」(v.8)戦いました。“この世の子ら”と比較して、“光の子”である私たちカトリックの子らは、どの程度“神のことばを委ねられた務め”に忠実であるでしょうか(Iテサ 1:8 参照)。今朝の福音書は、私たちにそのことを問いかけています。

### 2. Iテモ

vv.5-6 「神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。この方はすべての人の贖いとして御自身を献げられました。」

この福音を宣教する務めは、使徒たちの仕事であって、私たち信徒は単なる宣教の受益者であればよいなどと思ってはなりません。カトリック教会では、福音を宣教する務めは教導職だけに限定されていて、信徒は信仰的な精神で世俗の仕事と生活に従事していればよいという誤解が、広く見受けられます。しかし、それは間違っています。

正しくは、福音を告げ知らせる務めは、信徒、修道者、聖職者に平等に委ねられているのです(教会憲章 30 参照)。信徒は特に、それを“世俗の中に生きている”者としての立場で、果たすように求められている

のです。

v.8 「だから、わたしが望むのは、男は怒らず争わず、清い手をあげてどこでも祈ることです。」

使徒たちと共に、また聖職者たちと共に、私たち信徒が“ゆだねられている務め”(Iコリ9:17)のために労することを、使徒パウロはここで教えました。“男”とは“男らしく”などと同じく、聞き手を鼓舞する表現であって、決して“女を”を除外した“男だけ”という意味に解釈すべきではないでしょう。

### 3. アモ

紀元前8世紀の預言者アモスにおいて、初めて神の民である選民イスラエルは、神の審判の対象以外の何物でもなくなりました(3:1-2)。商人の不正は、商人だけの罪で終わらない。祭司や職業預言者といった指導者層には責任がなく、不正を行う庶民だけが審判の対象になるなどということではない。それは“イスラエルの家”の罪だからです。その結果は、“主の言葉を聞くことの出来ぬ飢饉”(8:11)の到来であると預言しました。

それから200年を経て後、預言者エレミヤは語っています。民は神のことばを聞かず、「わが民はおのが栄光を、助けにならぬものと取り替えた。」そして「律法を教える人たちはわたしを理解せず、指導者たちはわたしに背き、預言者たちはバアルに従って預言し、助けにならぬものの後を追った」という主の言葉を残しています(エレ2:8-13)。

私たち信徒は、自分の不信仰と無知の責任を聖職者だけに責任転嫁すべきではありません。「彼らは(福音を)聞いたことがなかったのだろうか。もちろん聞いたのです。」(ロマ10:18) 聖書を通し、カトリックのミサ典礼を通して、「あなたがたにまで伝えられたこの福音は、……あなたがたのところでも、神の恵みを聞いて真に悟った日から、実を結んで成長している」(コロ1:6)ということが、私たちの実感となる日が来るように、共に励んで賢くふるまおうではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。

## 9月26日 年間第26主日

アモ 6:1～7 | テモ 6:11～16 ルカ 16:19～31

### 1. ルカ

v.30-31 「金持ちは言った。“いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。” アブラハムは言った。“もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。”」

カトリック教会は、聖伝と聖書が神の啓示の源泉であると、明確に教えています。金持ちとラザロの物語りで“モーセと預言者”と呼ばれているのは、イエスの時代には旧約聖書のことでしたが、キリストの受難と復活の後には、これにキリストの勝利の福音が加わって、使徒たちによる新しい宣教が始まりました。

私たち信者は今日、だれでも自由に聖書を読むことが出来ます。聖伝については、最も身近なものでは“ミサ式次第(会衆用)”と“信条”があり、また第二バチカン公会議の諸教父たちの教えは、容易にその公文書集で学ぶことが出来ます。

ヨハネ福音書は、イエスが多くのしるしを行ったことが、その処刑の原因の一つであったように述べています(ヨハ 11:47-53)。ユダヤ人の指導者たちは、イエスが死者の中から復活されても、それでも悔い改めて使徒たちの宣教を受け入れようとはしませんでした(使 5:28)。

私たちは一人一人、自分は聖伝と聖書を通して福音を聞いているだろうか、自分は本当に「悔い改めて福音を信じ」(マコ 1:15)ているのかと、真面目に考えてみましょう。実際、キリスト教信者であると意識している現代の日本人の殆どは、たいてい知識人であって、自分は「闇の中にいる者の光、無知な者の導き手」(ロマ 2:19-20)であると自負しています。しかし、神を愛する“信仰”、共にミサをささげている兄弟を愛する“信仰”に富んでいるだろうかと考えてみましょう。

人は容易に「この世の論客」(I コリ 1:20)になることは出来ますが、聖伝と聖書に耳を傾けることなしには、悔い改めて福音を信じることは出来ないのです。多くの雑多な知識を持っていても、「知らねばならぬことをまだ知らない」(I コリ 8:2)からです。

### 2. I テモ

v.12 「信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。命を得るために、あなたは神から召され、多くの証人の前で立派に信仰を表明したのです。」

テモテは使徒パウロの絶大な信頼を得た第二世代の教会の指導者でした(II テモ 1:6,13 参照)。それではこの勧めの言葉は、そのような指導者にだけ当てはまるもので、普通の信者にはレベルが高すぎるのでしょうか。普通の信者は永遠の命を手に入れなくてもよいのでしょうか。教導職だけが救われて、信者は地獄に落とされてもかまわないなどと考える人はいないでしょう。

この勧めの言葉は、私たち一人一人にも向けられているのです。「信仰を表明した」とは、先ず何よりも洗礼式の信仰宣言を指しています。そしてその信仰宣言を、私たちは四旬節の備えを経て過越の神秘の祭儀で、毎年また新しく表明するのです。私たちは、「わたしたちの主イエス・キリストが再び来られるときまで」(v.14)、この信仰の表明を繰り返して行きます。「掟を守る」(v.14)とは、この信仰宣言とは別な“何か善いこと”に励むという意味では決してありません。

vv.15-16の頌栄が、いつも私たちの信仰から溢れ出るようになるために、私たちには聖伝と聖書を通して福音を日々聞いていることが必要なのです。主よ、あわれみたまえ。現代の教会から、「主の言葉を聞くことの出来ぬ飢えと渇き」(アモ 8:11)を過ぎ去らせてください。今は信者だけでなく、司祭も修道者も皆等しく、主の言葉を見いだせないでいるのです(アモ 8:12)。主よ、あわれみたまえ。

### 3. アモ

v.6 「……しかし、ヨセフの破滅に心を痛めることがない。」

これをアモスの時代の、サマリアの上流階級の経済的文化的豊かさと宗教的無知を非難した、過去の物語りだなどと考えるはなりません。現代のキリスト教信仰の破滅、教会の破滅に心を痛めることなく、しかも“使徒たちから伝えられたキリストの福音”に無知な私たちへの、神からの警告の言葉を、あなたは聞き取ることが出来るでしょうか。

「神の富と知恵と知識」(ロマ 11:33)を知り、「神の義」(ロマ 3:21-26)を受けるために、聖書の宝庫は今まで以上に広く開かれねばならないのです(典礼憲章 51)。カトリック教会の典礼刷新を通して、「人々を信仰の神秘と恵みの泉に近づけるために、聖霊が教会の中に突破口を作ってくくださった」と語りかけた教皇ピオ 12 世の言葉が、現代の私たちにとって空しいものとはなりませんように。

ハレルヤ、アーメン。